尾高知神社・お頭様

高木芳生
故高木嘉吉会長 長男
（佐伯市鶴岡町）

佐伯史談会が発足して、四十周年を迎えるそうでまことにお目出とうございます。

歴代の会長さんと会員の方々が、黙々と積み上げた努力の結晶と心から敬意を表します。

先日、高司良恵先生より、「記念誌に何か寄稿して下さい」と話がありました。

私は、その方面の勉強がたりず何もありませんが、父高木嘉吉が長い間、史談会にお世話になっており、晩年にはりっぱな感謝状まで頂いて深く感謝しております。御恩に報いるためにも何かせねばと思いました。

父は、若い時から郷土史の研究に興味をもっており、特に佐伯氏については色々な面から調査研究もしていたようです。

又、史談会の方々と調査と観光を兼ねて広い範囲に旅行しており、旅行の資料を整理するのも大変で、いまだ手をつけていないのもある有様です。元気な間は旅行するのが生甲斐だったと思われます。

私も、史談会の方々の調査などに、車を出して便宜をはかったことが度々あります。

その一例です

昭和四十七年十一月、宮崎県北川町に行きました。行き先は尾高知神社、同行の方々は羽柴弘先生、龍護寺の和尚さん、今一人の方は名前を忘れました。それにうちの親爺さん、私は運転手です。随分昔のことで、同行の三名は皆故人になっています。今一人の方のことはわかりません。

青山の黒沢から林道を抜け三河内口、途中親爺さん、右に行け左に行けと道案内のうまいのに驚きました。もう何回も行ったことがある、と聞いてもう一度びっくりしました。

海の見える峠に車を止め、茅の繁った小道を進んでいきました。かなりの道のりです。社は尾根の北側にあり、大木に掩われて昼なお暗く、人家や人影はなく一人で行くには淋しすぎる所でした。荒れた社屋、苔むした

墓石（？）、ここが惟治自刃の地かと胸に迫るものを感じました。

その時の様子を御手洗一而先生著「巴の鏡」より引用させて頂きます。

「ここなら大丈夫」

という安心感と、佐伯領にいつでも引き返せるという安堵感が急に一行を疲れさせた。しかし、尾高知へ進んでから、突如として時ならぬ喊声が起こり、先発した右馬允が血相を変えて戻って来た。「殿、敵の襲来、五六百。すでに囲まれた模様でございます。」

右馬允はすでに抜刀していた。喊声はますます大きくなってくる。

定信の合図に右馬允は会釈を送り、本越、染矢、柴田の面々の呼び合う声が、あちこちに行き交った。

「殿、殿の御運もこれまでございます。長景へのうらみは、冥土から永遠に報いとう存じます。お供仕ります。御覚悟のほどを」

餅原監物は、惟治に自害を促した。これを聞いた惟治は、傍の高い岩に駆け上った。

「寄せ手の奴らよく聞け、われら無実の罪によって今ここで自害する。この一念、なんじら三日のうちに思い知らせてやるわ」

惟治の声は、味方の面々にもよく聞えた。岩上の惟治は、鎧を岩下に投げ捨て、脇差を腹に突きさし、十文字に腹を切り、返す刀を口にくわえて、真逆さまに落ちた。

「お見事」

定信の口から思わずもれ、それを合図に敵陣に躍りこんだ。定信は、惟治公の死を見届けてから、ふと佐伯将監の最後の言葉を思い出し、自分に言い聞かせるように、寄せ手の一人一人を斬り倒した。

「一緒に死ぬか」　そしてまた一人

「一緒に死んでやれ」

定信の体には無数の矢が突きささり、刀傷もたえず血が迸り人間の生き様ではなかった。力つきた定信は、傍の大木に寄りかかり、標的のように矢を受けてどうと倒れた。

時に大永七年（一五二七）十一月二十五日のことである。

（以上「巴の鏡」）

翌年、再び北川町を訪れました。

（次頁下段に続く）